

都の西北・カツ丼

われわれの周囲には、毎日、会社で昼めしに何を食べようか、考えるのをめんどろくさがって、いつも決まったものしか食べない連中をよく見かけるが、モーレッツをもつてなるアメリカの経営者の中にも、昼めしを食べる時間をもつたないと、毎日、サンドイッチとコーヒーだけ。「そのぶん余計に働け」などと豪語する、気の毒なご仁が少なくないようだ。

人間、死にもの狂いで働いて、成功するなり、お金がたまったりしたあかつきには、結局のところ、世界旅行や、コレクションをしたり、おいしいものを腹いっぱい食べたりするしかないわけで、そうと知ったら、その楽しみをわざわざ老後までおあずけにする必要はない。毎日の、一食一食を大事にした方が賢明だと考えつくべきではなからうか。

大正十年、早稲田高等学院の文学部に、中西敬二郎という学生がいた。さすが文学部を志望するだけあって、彼は「なあに、めしなんかどうだっていいのさ。要するに腹がいっぱいになりゃいいのよ」なんて無粋なことはいわなかつ



た。なにしろ、あの「カツ丼」のもとを考えだしたのが彼なのだ。

この中西敬二郎なる学生は、当時、早稲田界限にあった「カフェーハウス」という食堂の常連だった。その頃、早稲田の近所には飲食店は十軒ほどしかなかったというから、どこかの店に一日一度でも顔を出せば、卒業までにはだれ

でも「常連」になることは、たやすかつた。この中西クン、カフェーハウスでは一日おきにカレーライスとカツ飯（現在のカツライス）を交互に食べていたとか。が、さすがに飽きて、ある日、店のおやじさんに思いつくままに特別料理を注文した。皿のメシをドンブリに入れ、カツを切つてのせ、小麦粉とソースをどろりと練つたものをかける。これが中西クンの特注した料理で、いまのカツ丼はその後、これに改良を加えたものだとか。